



撮影—志賀 哲

## 中洲(人形小路)

艶っぽい空気が

コピーライター 谷本 幸

村上春樹さんが風のような小説でデビューし話題になっていた頃、私は二十代の前半で、毎晩のように中洲で夜更けまで過ごしていた。飲みに行くバーも、メンバーも、会話も、なんとなく「風の歌を聴け」や「1973年のピンボール」みたいでつかみどころがなかったが、そこには絶対的な永遠があった。

しかし、時は容赦なく過ぎ、当時通っていた店の半分以上は姿を消した。私たちが好んだのはちよつと隠れ家のような空気が漂う地下や路地にある店で、何時が閉店時間なのか誰も知らないような、底無し沼的な店が多かった。そしてそういう不思議な店は中洲によく似合った。

天神の繁華街に比べ、大人の酔客が多いのも、中洲に傾く理由のひとつだった。十代の頃から私には「早く三十になりたい」という大人志向があり、いろんな意味で大人っぽいものに憧れていた。待ち合わせの店を屈指して中洲大通りや西中洲を足早に過ぎる時、いっばしの大人になったような得意な気持ちにひたっていたものだ。

あつという間に時は流れ、すっかり大人になった今も変わらず私は中洲のファンだ。とりとめなく話をするのが好きなのでカラオケのあるところには行かないが、有線でコブシものの演歌が流れている場所は嫌いではない。中でも、一年中雨上がりの匂いをするような人形小路は、その狭さといい、店のひしめき具合といい、私にとって文句なしの雰囲気を感じさせている。再開発で迷路のような通りが次々と姿を消している昨今、飲み屋街としての色気がある、福岡市でも貴重な場所だと思ふ。願わくばいつまでも、艶っぽい空気を漂わせたまま、寄り道の好きな人たちが温かく迎えてくれる場所であってほしい。